

◆「須恵村」～日本の村～研究会のご案内（全2回）

エンブリー著『須恵村』から見えてきたこと なにが読み解けるのか

今春に『須恵村』という本が出版(農文協刊)されました。そこには協同とはなにか、なぜ協同労働なのか、さらに協同組合とはなにか、なにゆえに協同が登場したのか、おおいに考えさせられるテーマと材料が、ふんだんに詰まっています。読み解き方によっては、明治以降から今日までつづいてきた近代化の功罪といったようなコアな問題についても、突き刺さるように積みあがっていてもいます。

本書はエンブリーという米国の人類学者が、1935年ころ熊本県球磨郡にあった須恵村を訪ね、その村の暮らしぶりを調査した報告書です。元新聞記者の田中一彦さんが、その原書名『Suye Mura』を80年後の今年に新・全訳して甦らせてくれました。

若い人たちが読了すると、今の暮らしの風景との落差を極端に感じながら、ともに暮らしとは働くとは何か、きっと再考されることでしょう。「須恵村」のような類似体験を知っている年配の方は、子どもときの原風景のようだと感慨に浸るかもしれません。そのどちらの年齢層にあっても、私たちのいま生きている便利な都市化された日本と、壊れそうだけれど今も残る農村地域共同体との対照を考えさせられ、相互の関係性を維持しながら変貌を遂げ、補完しあってきたことがわかります。

いまは都市と農村を問わず、個々バラバラの状態に追いつめられ、社会的な孤立分断か、共につくる社会的協同(組合)の関係に寄り添うのか、その瀬戸際に立たされていると読めなくもありません。

記者は、後書きにおいて次のようなことを万感を込めて書きます。「エンブリーが描いた須恵村の風景を過去形のノスタルジーで終わらせるわけにはいかない。研究書の枠を超えて、現代の急所を逆照射する鏡として『須恵村』とエンブリーがよみがえり、暮らしの「標」として読み解かれることを切望している」と。

ジョン・F・エンブリー著『須恵村 日本の村』(田中一彦 新・全訳 農文協 2021年5月)

////////////////////////////////////

*関連して「須恵村」について書き下ろした田中さんの著作

田中一彦『忘れられた人類学者 エンブリー夫妻が見た日本の村』(忘羊社 2017年)

田中一彦『日本を愛した人類学者 エンブリー夫妻の日米戦争』(忘羊社 2018年)

『須恵村 日本の村』を初めて手に取られた方、あるいは未読の方、以下のサイトに入りYouTubeにおいて田中さんのコメント講演を聞くと、内容の理解が早いかもしれません。

以下サイトには本書の目次や簡単な紹介、資料、動画などもあります。

<https://toretate.nbkbooks.com/9784540201578/>

<https://youtu.be/71zhA6VGb1k?t=5>

- 第1回 それぞれに見えてきた「須恵村」
 どのように「須恵村」を読み解いたのか

- 開催日時 2021年11月18日(木) 18時30分～21時(以降 懇親会)
 (Zoom オンライン開催 18時以降の入退室可 散会も自由)
 *質問・ご意見などある方、そのまま懇親会にも参加を

- ゲスト 多仁 照廣 若狭路文化研究所 所長
 *若者仲間研究から見た『須恵村』

- 田嶋 康利 日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会 専務理事
 *労働者協同組合法制と協同労働という再視点

- 村上 了太 沖縄国際大学 教授
 *沖縄の共同店の歴史と対比しながら

- ホスト 田中 一彦 小農学会 ゲストスピーカーのコメントに応える

- 参加定員 20名 (申し込みは先着受付となります。定員になりしだい終了)
 Zoomでのオンライン参加形式となります

- 主 催 「須恵村」を考える研究会

- 後 援 若狭路文化研究所、協同総合研究所、小農学会、
 日本労働者協同組合 (ワーカーズコープ) 連合会

- 参加費 無 料

- 申し込み先 ueyasu7@gmail.com (上平泰博)

- 申し込み方法
 *お名前と、ご自分のメールアドレスを明記した上で、上記のアドレスへ送信
 定員内で参加受理された方のみ、11月初旬に参加のアカウントを返信メールします